

## 問題の所在と展望

中島圭一

京都が中世日本における最大の都市であり、朝廷とその周囲が体现する古代以来の秩序や伝統文化、あるいは室町幕府が築いた政治的構造や規範など、全国に対して様々な面で大きな影響を及ぼす特殊な地位にあったことは間違いない。ただ、その影響力はもしかすると過大に評価されてきたのではなからうか。

例えば中世国家論においては、権門体制論や室町幕府―守護体制論など、京都を中心に据えたものに関して、すでに多くの指摘がある。私自身が十分に議論を理解できていないので深く立ち入ることは避けるが、もし権門体制論が天皇（もしくは治天）を日本の中世国家の頂点に置くことにこだわるのであれば、その地位が鎌倉幕府の左右するところとなった承久の乱以降に当てはまる議論ではなからう。また、室町幕府―守護体制論が幕府による守護職補任を分国支配の前提と位置づける限り、守護職がないままに一国支配を実現する実例がある一方で、守護でありながら国成敗権を実現できない事例も存在する、言い換えれば守護職がその国の支配の必要条件でも十分条件でもない現実との乖離は覆い難い。山名氏・大内氏のような大名から伊勢国司の北畠氏、さらには備後の広沢氏のような国人クラスに至るまで、南朝方として培った勢力を保ったまま室町幕府の秩序を迎え入れられた者が広く各地に存在しているのを見れば、京都で取り繕われた枠組みよりも、在地における現実の力関係が優位にあるのは明白であろう。これに対し、文化や儀礼の面では京都の有する規範性が疑われることは少なく、国文学のように、むしろそれを当

然の前提としている分野もある。考古学においても、戦国期の地域権力の居館で検出された建物・庭園や出土した高級貿易陶磁・かわらけなどに京都の規範の模倣を見出し、大名や国衆の支配の正統性をアピールするために室町将軍家の権威を利用したとする小野正敏氏の議論が大きな影響力を持つている。しかし、京都を中心とする秩序が保たれていた段階には、権威や正統性に弱点を抱えていた大名も含めてほとんどそうした動きが見られず、応仁の乱を経て権力と権威が失墜した幕府に対して挙って正統性の補強を求め始めるというのは、いささか奇妙に感じられる。実際、今川氏の「かな目録追加」二〇条が「守護使不入」について「將軍家天下一同御下知を以、諸国守護職被仰付時之事」だとして、「只今ハをしなへて、自分の以力量、国の法度を申付、静謐する事なれば、しゅこの手人間敷事、かつてあるへからず」と主張しているように、戦国大名はむしろ幕府に依存しない、独立した権力と自己規定していたのである。

そこで、私自身は「あくまでも地域権力としての自立を前提に、大名の地位を荘厳し、主従関係を可視化する儀礼の既成の式次第や周辺装置として受容されたのであって、中央との結びつきを誇示して権力の正統性をアピールしようとしたわけではあるまい」と考えている(拙稿「戦国時代の大名・国衆にとつての室町幕府的規範」『発掘調査成果でみる16世紀大名居館の諸相—シンポジウム報告—』東国中世考古学研究会、二〇一六年)。すなわち、武力によって確立した支配を安定的な秩序につなげる目的で、主君の権威や家中の序列を目に見える形で示すにあたって既存の礼法を借りてきたというだけのことであり、ゼロから新しいシステムを創り出す手間さえ省けるなら、必ずしも京都のもの、室町幕府のものである必要はなかったのではなからうか。

以上のような京都の規範性への懐疑から企画した中世学研究会第一回シンポジウム「幻想の京都モデル」においては、私の趣旨説明の後、次の八本の発表が行われた。

桃崎有一郎 「関東」の成立と「京都」の相対化—中世社会の基調としての多核化—

有木芳隆 中世球磨郡の仏像制作と京都―「京都様式」の受容と地域―

伊藤裕偉 モデルの需要と受容―土器からみた「京都モデル」の位置―

本間岳人 石造物からみた東国と畿内

小川剛生 「戦国時代の文化伝播」の実態―地方は中央に何を求めたか？

佐々木健策 庭園遺構にみる戦国期城館

木下 聡 中世における諸階層の官途受容

福間裕爾・ミヤコをうつ(写・映・摸・撮・移)す

報告者とタイトルを見れば明らかのように、儀礼・仏像・かわらけ・石造物・学芸・庭園・官途など、京都ないしその周辺で形成された規範の影響が強いとみられてきた分野を取り上げて、地方におけるモデル受容のあり方を再検討し、民俗学から文化伝播モデルやミヤコへの視線のとらえ方の提供を得ながら、規範性の限界に焦点を当てようと試みたシンポジウムである。詳しくは各報告者が本書に寄せた論考に譲るが、鎌倉という新たな核の登場による京都の相対化、京都モデルから離れた地域独自の様式の創出、京都モデルというよりもそれを受容・消化した伊勢から東海道方面への影響、畿内の様式を変容させた独自モデルを樹立した関東など地域ごとに多様な拡散のあり方、地方の求めに応じた京都の伝統文化のアレンジ、年代が下るとともに模倣から自立へと展開する戦国大名の志向性、私称が広がる武士や身分標識として用いる村落における官途と朝廷とを結びつける意識の希薄化など、多様な論点が提出された。

討論では、戦国期地域権力の研究者から、京都モデルの受容は権力の自立のプロセスにおいて必要なものだったのではないかと、私見に疑問を呈する声があり、全体としても中央の規範性を重く見る意見が多いように感じられたが、その一方で、中央の文化を地方が単純に受容するというような構図が崩れたのも明らかになり、「京都モデル」